

子どもと(3)

六月・ゆたかに

清水 光子

五月の、日光と風とうるおいに育まれた生物が、次の成長のために何よりも大切な水を恵まれて、しばし憩いのおきを自然から与えられるのではないか、六月というのは？でも決してただ休んでいるのではなくて、木や草はたえずエネルギーを貯えるのに一生懸命だし、動物達、鳥は幼鳥が巣立ち、子馬や仔牛は野を盛んにかける六月なのだ。

「育ての心」の中の「六月」倉橋惣三先生は「外には雨が降りつづいている。部屋の内は笑い声で晴れわたっている。窓硝子はぬれて曇っているが、子ども達の顔はみんな明るく輝やいている。外からの光でなく、内からの光である。天の太陽は雲につつまれる日があっても、この小さい太陽たちは、いつだって好天気だ。」と言っておられる。

「雨の日はどうしてもエネルギーが発散出来なくて、子どもたち、さわぐし、けんかし

たりして、いやね。」という保育者の声をきくことがある。エネルギーの発散ってどういうことだろう。体を動かす、走る、大声をあげることはもとより発散の一つであろうが、もっと静かに、徐々に内への発散の仕方もあるうし、エネルギーをただ発散させればよいのではなく、内なる成長に役立たせるのが子どもをとりまく大人達の心くぼりの要点ではないかしら、と思う。少し理屈っぽくなって恥かしいけれど。

数年前ニュージーランドの幼稚園を見学した日、彼の地では珍らしくドシャ降りだった。その日の光景はまさに、前にあげた倉橋惣三先生の描かれた「六月」の光景であった。二、三人の子どもがフランス窓側で肩に手をかけて、外の芝生の水たまりが、ぼしゃぼしゃはね返っているのを眺めている。室の中の大積木の家の台所では、本物の野菜で、エプロンを掛けた小さいママがお料理を作っている。お父さん役の男の子は木片とトンカチを使って何かを作るのに懸命。そして、少し広いスペースでは女の先生がギターを弾いて、その調べに乗って十人程の男女児がダンスを踊っている。雨の日も亦楽し、など物知り顔につぶやいたりするのはなくまことに自然に、自然と一致しているのだった。

前出の「六月」の文章のあとに「またしても鬱陶しそうな顔をして見せるのはおとなだ。」とあるが「うつつうしい」というような言葉は幼児は知らなくてもいいのに、大人が教えるのだ。

筆者が幼いとき教えられた童謡に「見る見る降り出す大雨は、ザアザアザア面白や、お庭にお池が沢山できた、舟も浮ぶよ、金魚もうくよ、ああうれしいな、うれし

な、もっともっと降れ降れ」というのがあった。このあとに「雨は草木のお乳です。」とか「大川小川海へ出て」という水の旅のような歌詞がつづくのだが、子どもが雨の日をうとうしがらない気分がよくうたわれているなど、今になって感心してしまう。

雨の童謡というと思い出すのは「雨が降ります雨が降る、遊びに行きたし傘はなし、紅緒のカッコも緒が切れた」というモル調の曲、歌詞に時代の変遷を感じるとともに今の子どもは、外へ遊びに行きたいと、切実に思うのは雨の日に限らないのではないか、むしろ、雨の中を傘があるうがなかるうがバチャ／＼と水をはねちらして走りたい衝動にかられる子ども達がいるのでは？ など思ったりする。

「雨が雨が降っている、きいてごらんよ音がする、」という雨の童謡の穏やかな、イマジネーション豊かなうたの心。「雨々降れ降れ母さんが、蛇の目でお迎えうれいな」の童謡の何と活きいきしたリズムミカルな優しさあふれた詩情の豊かなこと！ 今の子ども達でも大人が心をこめて楽しく一しょにうたえば彼等のやわらかい心はきっとその心を受けいられてくれるのではないかと思う。

六月の色は水色だろうか？ 黄色だろうか？ 濃緑だろうか？ 保育室の壁飾りに、よくあじさいとかたつむりがコンピで使われる。あじさいの花は本当にこの時期にふさわしく美しい。つゆ晴れにこんもりと咲くエメラルドのような、アクアマリンのような、サファイアのように輝く花のかたまりはたとえようもなく美しい。ただ、またしても私の意地悪な言い方になるが、飾りをワンパターンにして欲しくないのだ。子どもの感じ方、それ

それを型式化してしまわないようにして欲しいのだ。

六月は目立たない木の花が咲く時期でもある。栗、かし、うつぎ など。梅雨空のうす暗い夕暮の小道に甘いような懐かしい匂いが漂ってきて、疲れた心をふと和ませられる。

『万緑叢中紅一点』のざくろのはにかんだような紅の花、谷をへだてた向いの山裾に一きわ高くまっ白に花をつけた木は何だったろう。

ゆりかごの歌に出てくるビワの実が色づくのも六月、そして二月あんなに香を楽しませ、早々と春の来たのを告げた梅が青々とつぶらな実をつけるのも六月である。つゆ、梅

雨の字のいわれは言わずもがな。さくらんぼの子どものほほに似たつややかさ。

自然は、一つ一つ説明したりみせびらかしたりしないで、着実に動き、創って積み重ねを示している。このことを子どもと一しよに深く感じたいと思う六月である。おのずから湧き起る感動が、子どもの中に、現代、兎角鈍くなったといわれる感性を豊かに育てていくのではないか、など、老婆は思ったり……。

(音羽幼稚園)

